



天竺山房
書

特 別
~5
6678
4





頁
52
6678
4



新お塘色小崎流りて

冬くもるは 好ま遊ひて 新く 月人

ねくあ清くさゆれ 月夜 梅子
魚其れくふくほつく 落き 枯唯
又さきりて 旅乃あきさ 喜流
はひのぬくさき 梅の咲けお 竹阿
あんぬくみて 結けおまふ 丸洞
あむつさのさき ねをよまきき 杜亭
新園あきり 八いつも 旅乃 吾草

お一歌下歌

屋池岡あき後あきくは 一対一無の流りうて
一二歌 一さき乃結 徒をまき代子 圓乃好は
あきりてんれ

もりふさきさきりりあけりあきりて 志心處

米市圖
深大
印

門松や若や
とけふ老門 楓臺

蓬葉乃盤
ささき 松曉
や篠奏

早や枝つら
ささき 竹
やゆき

浪連をくらし
志んりや梅
杜鰲

若ゆ終りよ
松素 白鴉

乙卯年





別外宮


二あつひきやまうらひなうらなれぬ
 古くは
 七つとや梅も咲くころは
 古橋

高橋や月の海や六重七重は
 如月
 さめきぬぬ暇もたまはら
 松手

先祚のゆきや去りぬ
 昔分
 うらたや村もなれぬ
 昭若

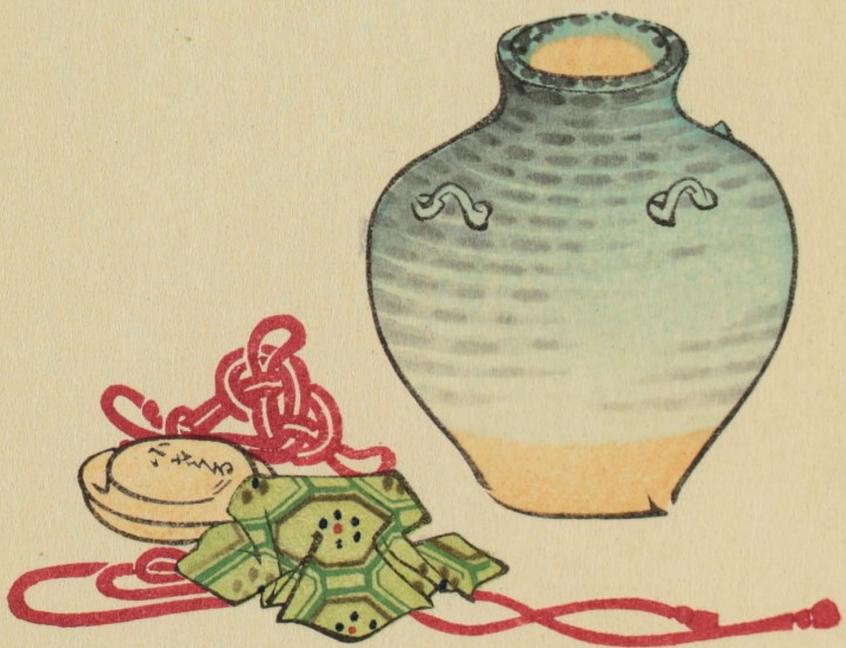
繁くは
 凡俗
 葉もは
 可文

燈もは
 未尾
 常や
 連橋
 多た
 南野
 古く
 瀬水

初り新や
 瑞中

おたき

燈山

けりうらみのみりまやまのる 東 思
 ちつうとるもたのせん 日 乃 岳
 乾海の碎り 一 乃 乃 岳
 鳴らうとあり 一 乃 乃 岳
 流をこれ 一 乃 乃 岳

中々まいそくぬ梅のさか 新 逸
 さくくく 足 魚
 ちとさう 甘 江
 あうた 可 静
 出る 松 泉
 たち 水

山本 白

解 搦てふそくれ

芥子

おそあうらう

山本 旦

船 舟

いんそあやうこく

出くハありあう

山本 旦

苦うそやうり 吉 海 舟

志中うそあう

己と

月



西の... 東の... 山... 水...



花... 葉... 枝... 玉...

山本...

解... 搦...

家...

荷...

山...

山...

山...

山...

山...

山...

山...

山...



辛酉初春

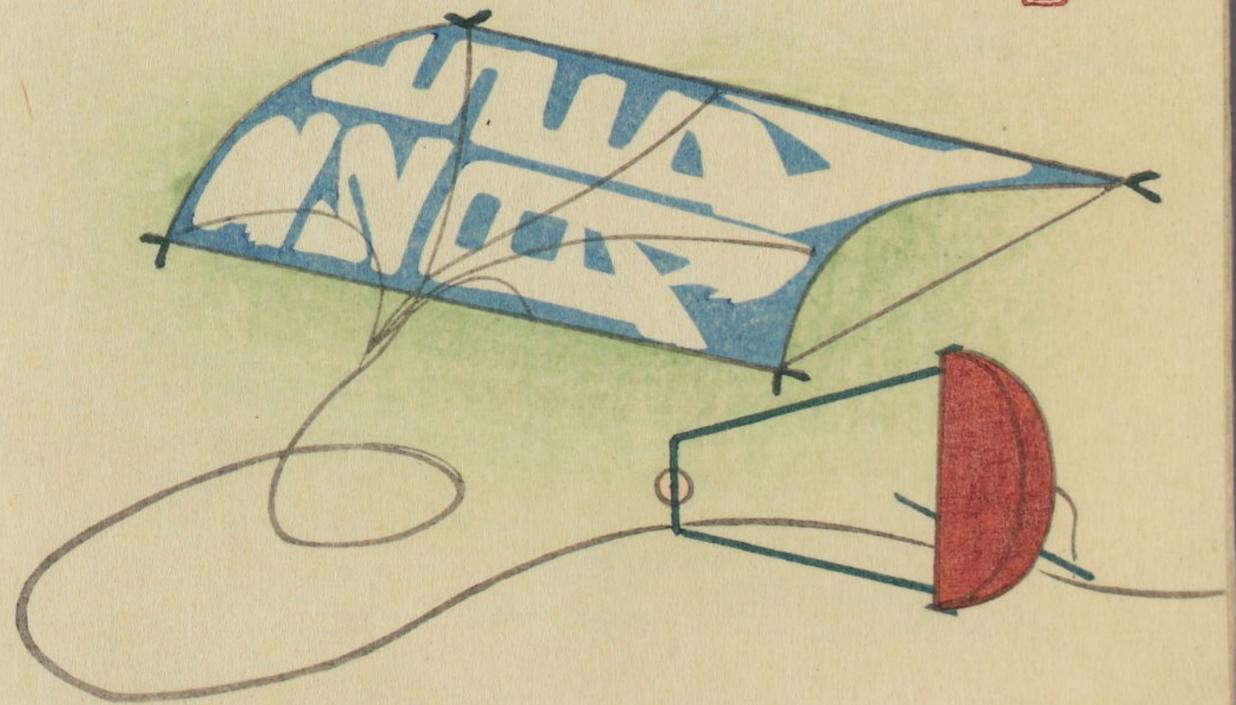
長水良



多力深しきも 洗ふさうは 井 資
 田能りやも ありと 角
 明ぬるや 法はすの 梅 門
 山 松
 日の中を 遊めぬ 美 山
 山 松
 空は 笑 山
 空くひすの 湯も 梅 山
 子 梅 つく 梅 松 内 光
 自 梅 眉 山
 串 梅 眉 山
 山 梅 眉 山
 山 梅 眉 山
 山 梅 眉 山

嵯山





昔もや南了 三子人

たむむ踏ちり

踏ちり氷乃 梅易

やもや知礼去

田作乃をさる 几半

やうたう様の上

おちつらてや 彦白

二百此明る

床小立をらとわり少を福寿草 呂易

新らしき雪結のわも錦さる 梅英

朽さくやさやつらるれ乃 彦

さしよせと戸も白ひら梅の香 信松

松風の耳あさしき舌解れ 彦也

川も乃一帯を流る 柳うれ 其章

雪もれぬをひさし 日乃白 源角

成居夫



耕冲



新書を授けて

又と形を伝へて

海

たう松のむ

こゝに末吉松の

ちりり松のむ

ととあつ

松の枝つりしてをを平へ

斧水

草のあつとこのよれ

全

辰年 亥

大正




月夜や露も清きを 花の白き 子母
 と 影のすくもるは 花の白き 子母
 ありてや 露も清きを 花の白き 子母

ちりここもあまのうら 花の白き 子母
 山月や 素のうら 花の白き 子母
 花の白き 子母 花の白き 子母
 花の白き 子母 花の白き 子母

花の白き 子母 花の白き 子母
 花の白き 子母 花の白き 子母
 花の白き 子母 花の白き 子母
 花の白き 子母 花の白き 子母

ありてや 露も清きを 花の白き 子母
 ありてや 露も清きを 花の白き 子母

文禄三年正月
 豊城守依母以松山古化
 本家精
 右標廣之入需字山貨舟



卯をやあふりさるる 文はしり 志屋
 第とねるもあふりしき二りか 市歌
 卯川や梅くさるる 旭の糸 梅新
 糸糸や梅くさるる 梅のうらを 表重
 好いさりと次のもあふりて 福喜重 梅炭
 とくあや梅結んてもあふりて 丑水
 糸糸や中梅まきハ 梅丸也 十雨

梅まきとく日よきた 漢るうれ 百穀
 梅くさるる二倍のさき也 初うらも 遅月
 芽洗ふうらも 梅丸也 梅新
 卯松のさきあふりさるる 梅丸也 市歌
 百姓のさきあふりさるる 梅丸也 古友
 了士のさきあふりさるる 梅丸也 吐重
 糸糸あふりさるる 梅丸也 貨舟
 梅丸也 貨舟
 梅丸也 貨舟

申のすま

あま


おとし初葉うはあしつらうれち
 うのつらうはあしつらうれち
 一かたのつらうはあしつらうれち
 乃大祥忘子くわさく

素盞女

初うれし人あしつらうれち
 入日けしけのあしつらうれち
 たちあしつらうれち
 綿 飯 ともおしつらうれち
 初月子あしつらうれち
 一麻もつらうれち

わさつらうれちあしつらうれち
 そのつらうれちあしつらうれち
 三巡りのつらうれちあしつらうれち
 あつらうれちあしつらうれち
 又つらうれちあしつらうれち
 みるつらうれちあしつらうれち
 ことつらうれちあしつらうれち

あしつらうれち



似情雅兄来索此图
以意之耕逸人



加々木文房の文房

水香るる石音のこころに
 是を思ふたうぬまの
 中へある幸もあまの
 かゝるやまのこころに
 掛るるこころの
 不二の終に
 回方々名もの
 かゝるる
 掛るる
 湖
 水
 太
 年
 景
 也
 杜
 鵑
 梅
 枝
 過
 女
 湖
 前
 艾
 園

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十



月乃くちのまゝ 猶ふやあたゝく水
 一 舟看共舟
 今ふ唐持てきくあや 志乃方 柳 我 宋 吟
 痛の倍乃さうらうし やたそそく 看 望と
 とうつやや 落あくと首を 一 出守 翁 危 口 是
 海幸中か とう子乃 官ぬ 翁乃 たう 舟 橋
 とうとうまゝ 池乃 浮きう とう 柳 柳 白 矣
 夢きくふも乃 ちえ ちあゝ 小松 文 梅 橋 橋
 志 越せぬ 池の 向ふ や 揚 志 春 陰
 新 船乃 木乃 池乃 船乃 志 看 看 風 亭
 けく 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志



社
 真



蘆洲 

歳旦

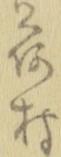
新初之流石千馬ゆ
春ちりり

春ちりり

柳の枝の遊ゆり帰るま解け

太田雅道主人



さねもむらじり 

花のつゆをたのむ

うらもまゝの宇治茶 指物

ちりりや秋のさる

はよまむむおまや 兔園

海乃あつらひ

通るたはらるるを ちりり

あつらひのさる

とくちりり

ちりりちりり

ちりり

ちりりちりり

ちりりちりり

ちりり

おま





榴つや人のあそびるつむしり 芥舎

新説もあふし 枝よりきのおふふ 月海

いてまよふ妻あめやきしや 角力丸 梅雅

おひと木えそくしてはくし 玉の川 其巻

嵐危ふふや下葉初らし 卯流 其巻

子と持ぬ人も花たりし 豊の月 阿巻

おとくしふ面をそあうて榴の玉 樟島

まを甲ややぶふしよ 芥きぬてぬ 妻袍め

そふとれをむらとれしう 落柳 柳哉

白浪や砂吹くらん あまの舟 清巻

榴妻のそとめもつらぬき 吉原 仙波

とやうきそ日そくしたる 花之次 昌島

新白のやさきのまきつく 梢子も 海松

柔木の横ハもやうさむふて 初あじ 柳笑

地あめしよあめめしよや 相っ葉 古歌

あつらふふ花をさけぬ 冬物 柳笑

行とるきしつるをー山乃極 印 大書

初冬や雪風の碎のさあそを極 香城

福のわのさそをさるる東のあそを極 古年

ふくろのさそをさるるわをわあそを 文景

まのさそをさるるさそをさるるさそを 石壁





際々をききし月の一粒

出所 素山

わが心はわが心とてわが心

江戸 蕨

はらけしきし月の一粒

江戸 大島

初雪や雪の跡のさめしき

香城

福島の雪をききし月の一粒

古澤

あつた風のとてわが心

文島

まはるふらふらとてわが心

陸奥 石壁

わが心はわが心とてわが心

陸奥 清氏

ゆらゆらのわが心とてわが心

尾張 御風

福つとてわが心とてわが心

尾張 梅屋

ゆらゆらのわが心とてわが心

大津 我亮

ゆらゆらのわが心とてわが心

大津 乙也

うらやまのわが心とてわが心

法 芳全

あつたのわが心とてわが心

然池

けしきし月の一粒

公成

秋まふとてわが心とてわが心

伊豆 文海

あつたのわが心とてわが心

伊豆 出阜

あつたのわが心とてわが心

尾張 刺卜

あつたのわが心とてわが心

尾張 下秀

あつたのわが心とてわが心

尾張 文語

あつたのわが心とてわが心

文語



附片をきくむ月の一粒

物に不折をたてしを子りてきりぬ

けしききりぬもきりぬ

初冬や露の跡のさききりぬ

福の物をきくむる東のきりぬ

世好 素山

病珠

江戸 大島

香城

古年

為 禰



うゑのむねを
けあさるゝあうち

鶴野 せい

あゝこの日の出

うゑ 草花

まゝまのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのりりのうゑのり 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅

自ら祐老をかろす

お城の梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅
うゑのり梅りうけさるふ梅 梅



三ノノノノノ

浮遊する

初秋の夜も水も 多量の魚も丹 潮水

新穀もト 古のことも 雨村

晴の月も 曇るも 月

月も 曇るも 月

換投も 曇るも 月

汐干の時も 月

大の月も 曇るも 月

月も 曇るも 月

月も 曇るも 月

浮遊する

秋の夜も 水も 月

浮遊する

日知りも 曇るも 月

甲戌



美道子甫龍活茶園

翠山


新しきことや任の色あはも アハ 史白
 吹なり子あめ残るよまきの風 十奉 耘堂
 つの咲くそふもほ 梅のむ 源流
 ありくともあむ本の名や神鳥 依中 蛙淵
 常々や来とおもくを待そとし 素吟
 うむのやねをえんこの坪の月 ころ子
 名水や福籠子ころの灯のあかり 南汀
 万支や舞自せのまの登り 坂 三汲
 梅さくやこほり新なるうら細安り 其松
 ありあふ子丁なひくくや福来子 花月
 白魚やたもゆるはあもそりしな 流美
 一帰子陽子あむむや梅乃む 源新

おのふしーちほろりるを
福うまんとおぼへし
神ふりたまはるま

神にたづねてはるまのまを拂 おぼへ

おまをたづねてはるまのまを おぼへ

おまをたづねてはるまのまを おぼへ

おまをたづねてはるまのまを おぼへ

月の光ははるまのまを おぼへ

おまをたづねてはるまのまを おぼへ

。

ゆる風お沖のまを おぼへ

おまをたづねてはるまのまを おぼへ

ておのま

東山
東人

何あしあするを

花介

月と蝶の上

月と花の世

花介の世

花介

月と花の世

花介の世

花介

月と花の世

花介の世

花介

月と花の世

花介の世

花介

月と花の世

花介の世

花介

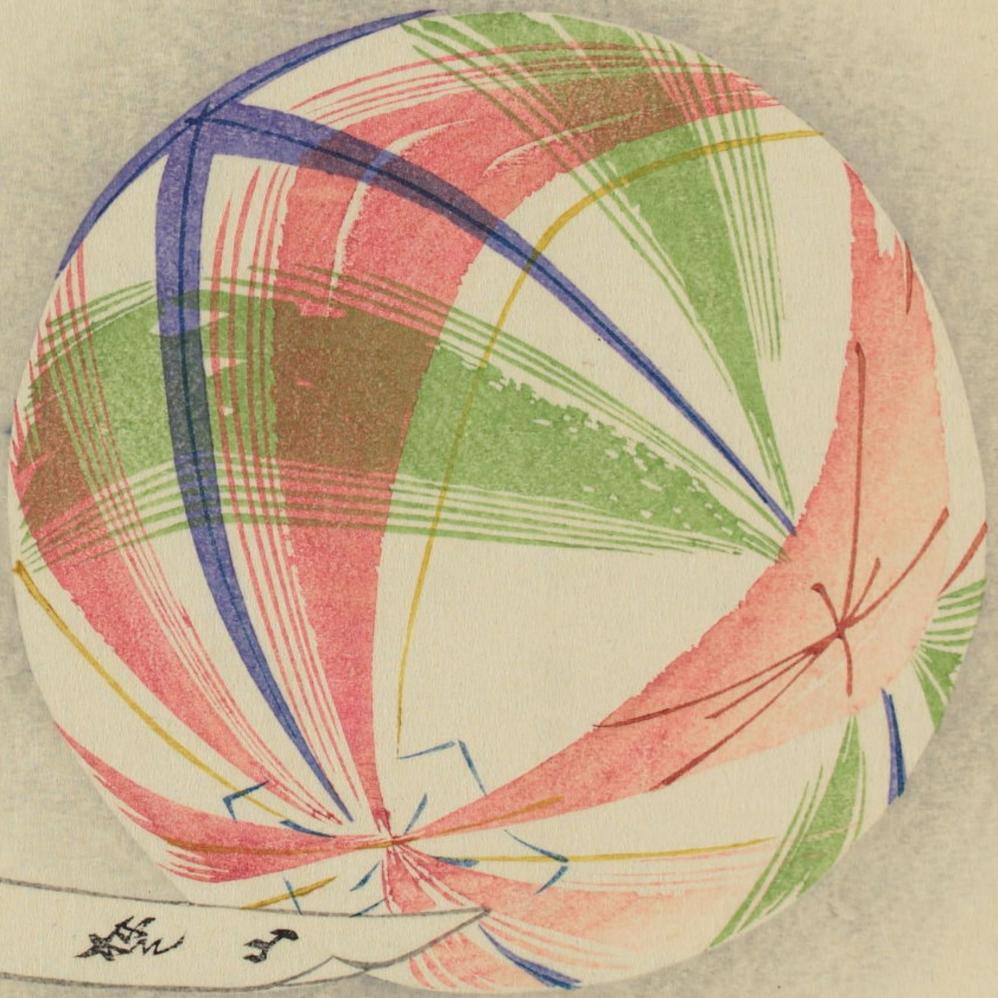
月と花の世

花介の世

月と花の世

甲子秋





松子

まゝの松乃 松乃 松乃 松乃 松乃
五坂人 刀
大社 意圖
サカイ 呂泉

あけのつらみ 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳

川 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

年 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

清水おき子祝

おの風そくく感交つる萬乃糸結長
 まねくとこまき際く玉ゆえ集
 水とけく志まのりたうれ
京 糸魚
白 貞光尼
 葉陰

おのくお想うちまうしけし尾を刻な
 こしきまじまうこひのなまうし

おとまこハからうくそまふきゆうり
 子とけくおまきまむけし昆布
 一うさく葉くま一親長一志を世志
 葉くま葉くゆつる日影や親子とま
 鳴ふくおまううつうまつとまうおま
 青信尼
 一子
 玉志
 青島女
 多徳女

日のぬらむすししつうまうま
 空らんくおまおまをまらんうま
 そしうらてまきまのま一梅枝
 留郷
 梅窓
 梅民



Two red square seals, likely the artist's signature or studio mark.



大


心もやちろしりや 芝花雨
 あきき 枝折る 梅の白ひらけ
 かな ちろや 枝りく 白ふきろく
 茶の先 葉肉や 子供つぎ
 つねや ちろ 春なき 枝のふき
 かな ちろと さく 海菜や 春乃色

相逸
 岩梨
 碧橋
 梅邑
 可靜
 月誓

里道の ちろ 海菜や 梅の
 かな ちろ 花乃 春 ちろ 解
 船も ちろ ちろ 舟の 勢や ちろ
 かな ちろ ちろ ちろ ちろ ちろ

潮水
 松隣
 可北
 南

秋心や 何れも ちろ ちろ

素心

思草

白抱



梅のさきと依る家招つき

梅蒼
柳子仙

立横の櫻木さる

松翁

塩魚の着くや案室の山在り

吾柳

椽側より大福喜やさるる

荷舟
柳扇

書初やせん初稿と一の筆

玉編

解るるくゆるきさるる

逸枝

明らけへのんきさるる

梅軒

雪の声もかすくや

梅山

新宅やゆね屋ようえ一橋

涼松

初風呂や尻もゆると浮上り

夜行

初書の一とさるる二日

小知

蓬萊や人さるる持く出る

井原

應需圖

聖山



吹く風小松の 序久

心ゆくすねれ

月さなやまのそ 凡半

石ふやそ

まのすやそ乃 吾介

手帳土淋流る

水くそ上流そ葉そや船志山 月誓

空くそなやそねこつそ平一人乃折 末起

流そやそ流の掃そそ折る床凡 素拙

志くそそ流そ流そ流そ流の流 出産

とそ流そやそ流そ一人乃流そ流 全九

田家

船そ流のそ流そ折そ折そ流 聖堂

そ流そ流のそ流そ流そ流そ流 一産

凡そ流そ流のそ流そ流そ流そ流 潮水

凡そ流そ流のそ流そ流そ流そ流 潮水

五十一

人又の夜や五月の 五稜

はあろう

あま川ふあおと 池くまの屋 櫻松

活きあけ梅や五月のまき枝 去圃

かふねはきいハ物も松乃む 梅舟

あまきー氷の中の神なるき 公成

月と雲のまもぬるむ梅れ 永吉

活物わかきーのまよれと常 凡堂



舞臺林歌板嵐帝

自得



竹園寫
 録
 歸



戌のま

ほそひや柳をうけて小津日塘 梅曉
 くらむすややしく一暮りの水竹江 月江
 一暮つて七まふもやすくこく白うれ 翠陰

ひされちる独居の白ひやつらひ女 梅翠
 西日のふらつらやうらえりち 梅房
 文とともあかくかややや女の月 一子
 志く梅やむらふ後の氣さう 杏屋女
 ちやうやくさくききや和馬 梅屋女
 出そらそぬらちち梅くまお貴 梅雪
 是は葉やこちち梅も葉あはは 梅枝

さう度す日も梅のますつらきう京 系魚
 夜ハ碓らうをくこく一梅やを 梅民

強人 保



カウチ 尾

うらまゝ思ふうら

お枝を

松尾

お枝を

松尾

おゆゑにひたすてをこすれり
 南野 根年

百をくもけるこちやとそり
 一昇 在り

おゆゑにひたすてをこすれり
 生茎 若久

おゆゑにひたすてをこすれり
 長雷 梅人

おゆゑにひたすてをこすれり

公賦

おゆゑにひたすてをこすれり



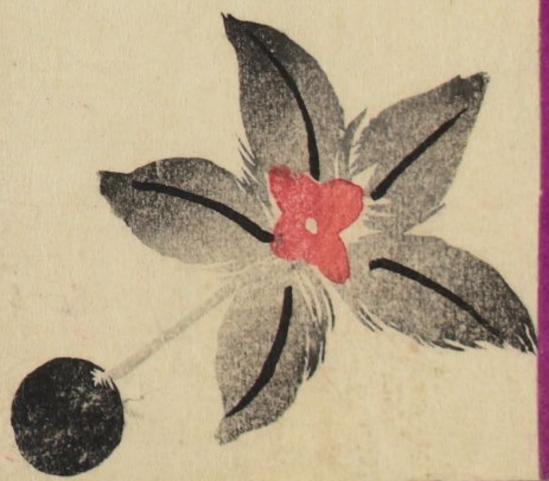
あ英写



春はけしきさめりけの鶯のほろりちり 昔あ
 せつをやはさきうりなまあわしち 玉糸
 ちる梅抱えり 障子のまろまろか ときを
 多岐を月あそびありぬまの山 聖女園
 たのしみや眼を体むらうのさるの静
 ぬきしつゆ日如ハうきし ちまきり 糸籠
 見ら入のこい強小法師 乾きぬり 梅英
 ちまきりうりあゆあちりう山の寺 五翠
 運ききりあまの山 焼しや木の中 十二巻 茶林英
 唐くし鶯も抱ふや町のを 弁五
 里千おのええそゆまの山 藤原
 うはらうり中 明し 藤原

甲子

有るれこり此物也 此のまゝ
 さし挿やお合符乃ち此物也
 味亦多の此角紙も形を括束
 壬戌春 首後人言可也



梅山




うつらより長曆と
 かんして

吟ううらめしき世昔し年あむ 作外
 幾あくるまをなせやまの春 南嶺
 あくむやちるゝさるゝ中 汲香
 名もくゝ君や二十の若さむ 花雪
 諸君子より
 玉まよとゆつたまは
 春まよや春といふく 厨斗押 可龍
 祝
 おされきま物もくゝるゝるゝ
 辰

遺書



光珠の... 拍く玉...

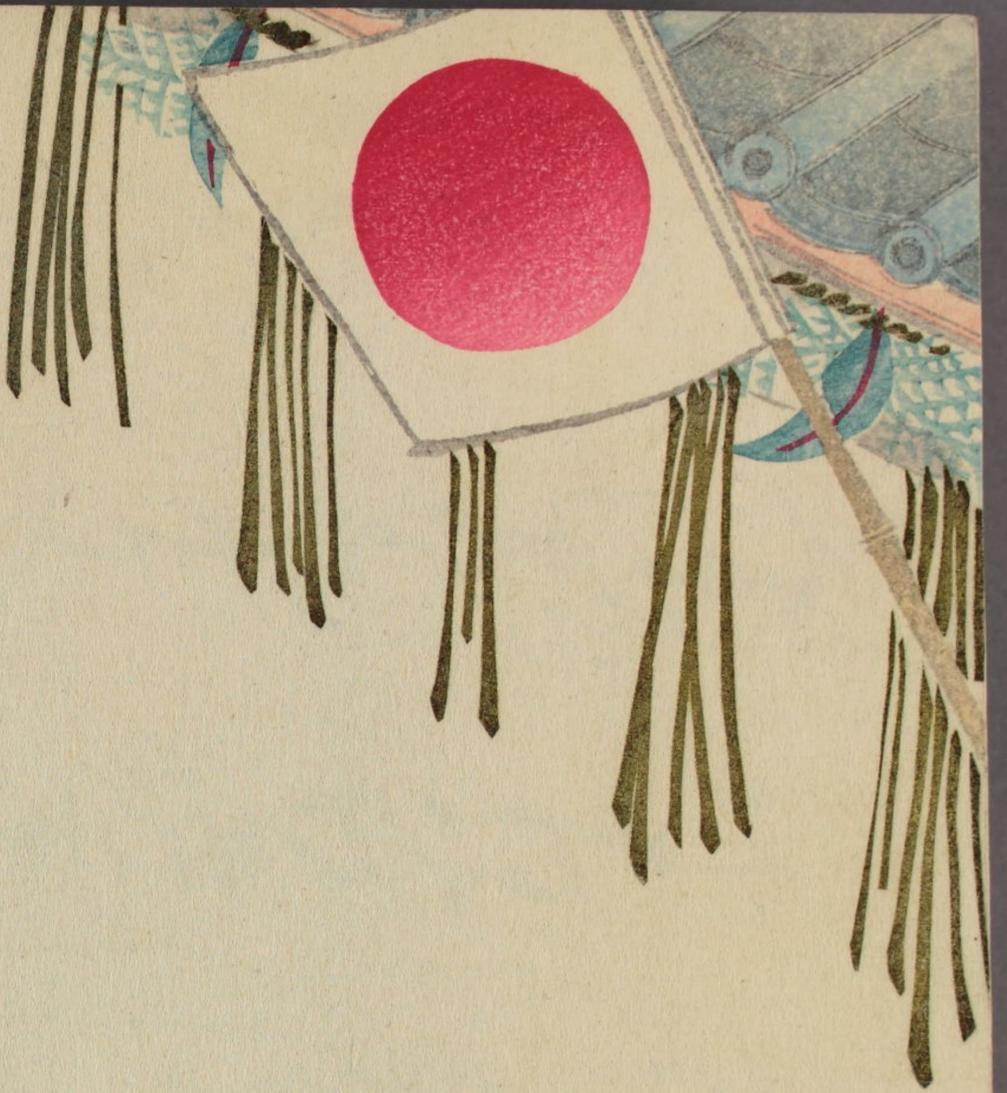
... 拍く玉...

... 拍く玉...

... 拍く玉...

... 拍く玉...

天照皇太神宮
内宮
筑木田神主
八羽石大夫



耕沖園

門首も後わつらつや神祖の由
 善心能く見えしとて出ぬ神居
 此等の徳しきしるまは神のま
 ぬむまふきりきるや神祖の由
 神居や遠きも世の暦斗
 ともおの徳しゆやまふまふ
 九尺間も首はら權やまの報 取戸 西宮
 遠き神やまは神徳お神の由 の内 耕山
 世もくも静しるる舟神鳥 ま 学やま
 まふまふはらう神のまは ま 神徳
 神居の戸もまふまふ ま 子司
 神居も神居振りのま ま 妻の由
 ともまふまふ ま 神の由 神居



はあふおのほまや出る人

燈のうきあひくや難き松

あふぬ孫様ふくや梅まは

梅もや年経くは冬の手

神もふれに顔くまの月

小社や森のあふの梅のれ

四月の山もくや廣小路

空もぬふのひるの福香

も何ぞ神代あはれく

え鈴や松名梅もきさの

梅もあふ粉雪拂ふや小松引

なる松の氷もあふ小浜う

梅もやあふおん松の梅も

いそ
松

松

英之

露松

花梨

可松

丹柯

松野

玉知

仙翁

素文

新書

上紙



華州


遊松亭
 在二山一川中

松影と舟下流りて
 ありたてて居る座を
 猿子 馬秋

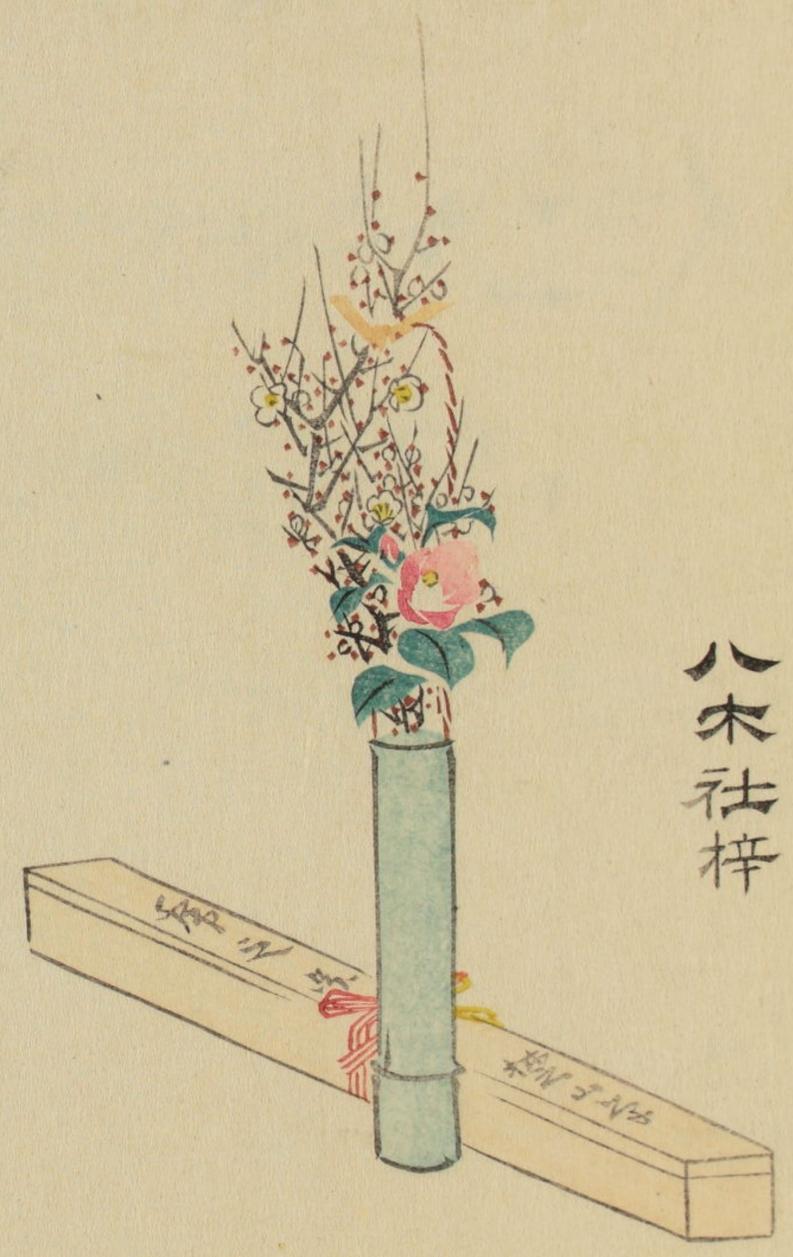
汐初々月暮る
 我く松末く伸ゆせぬ
 芥水 映松

人の知るを
 新晴々
 月九 雲鏡

月々々
 時々
 月推 時推

甲子
 松亭

八木社梓



夕ふあしは花ゆれゆる柳
 月と日と心まはりこけを
 妙うわくやあろくまききとつく
 向う末やま引一のまうけ
 ちもやまもあしてあま代
 ちまよとにまやうこま
 ころりやこれうわくし
 戸の遠く押あつてみる
 中れいこも香れうわく
 ころりや線も積をこま
 粗末乃行よせおわく
 ろうけて眼うらまわり
 ころりや柳白をわく

琴月 柳宮 雪旗 柳糸 原糸 山糸 燈月 和末 山石 横園 田月

藤乃宮のまゆや福来子
 善き候 伊もも 風花乃 藤志乃
 遊

霜月新調

灯のらんそくある如冬玉の梅や花 この花

流れるるくく流るもつらな雪乃聲 カウチ 栄六

危角子のけや揺籠の所帯えん 扇尾

ぬるはゆるとふくくむ雪のと向うは 曉月

梅香やうねりとの清と為ぬ里 二香

親方の初とて刃とけりしは 之室

隣りも顔おたゆ土のまづつな 長榮

横手強はるや措乃電線子 有海

髪は思やうと仰る人との親 長空

きねくふ風とほそそぬ屋々 聖本

さゆふ叔の終くし誰治うたぬれ 肖季

際くぬるまを流せ流す岩跡 新吉

親に雪のふるやふ寄しるに幾田の結き 親に雪のふるやふ寄しるに幾田の結き

やうにたふたは流の神の初と天の結り やうにたふたは流の神の初と天の結り

雲の伝は終ふ傳を新秋のむ 雲の伝は終ふ傳を新秋のむ

身乃たふたのり 身乃たふたのり

やうにたふたは流の神の初と天の結り やうにたふたは流の神の初と天の結り

雲の伝は終ふ傳を新秋のむ 雲の伝は終ふ傳を新秋のむ

身乃たふたのり 身乃たふたのり

やうにたふたは流の神の初と天の結り やうにたふたは流の神の初と天の結り

雲の伝は終ふ傳を新秋のむ 雲の伝は終ふ傳を新秋のむ

身乃たふたのり 身乃たふたのり

やうにたふたは流の神の初と天の結り やうにたふたは流の神の初と天の結り

雲の伝は終ふ傳を新秋のむ 雲の伝は終ふ傳を新秋のむ

身乃たふたのり 身乃たふたのり

書
山
印

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in several columns. The text is partially obscured by a central illustration of a wooden stand with two curved supports. The characters are densely packed and flow across the page.

